時事新報

明治十八年十月六日（火曜日）きのえ、むま
舊乙酉八月廿八日
日 出午前六時零分　入午後五時三十六分
月 出午前三時二十一分　入午後四時二十一分
滿潮 午前三時二十三分　午後三時五十七分
（西暦一千八百八十五年）

時事新報定價（日曜日ハ休刊）
一枚金三錢〇一箇月前金六十五錢〇三箇月前金一圓八十錢〇六箇月前金三圓四十錢〇一箇年前金六圓五十錢〇郵便税一箇月金廿六錢一箇年金三圓十二錢〇左ニ掲クル各地ニ於テハ遞送無料ニテ配達致候
東京　横濱　横須賀　從神奈川至小田原驛　函根七湯　大坂
京都　大津　神戸　尾ノ道　福山　笠岡　岡山　廣島
和歌山　德島　高知　下ノ關　名古屋　岐阜　岡崎　豐橋
四日市　津　松坂　山田　仙臺　福島　二本松　石ノ卷
函館　青森　弘前　宇都宮　高崎　八王子
其他同地近傍配達便宜ノ個所ハ同シク遞送料不申受候

時事新報廣告料（前金）一行ニ付

一行廿四字詰	一日限	二日以上六日迄	七日以上十五日迄	十六日以上卅日迄	卅一日以上
自一行至十行	十錢	八錢	七錢二厘	六錢八厘	六錢四厘
自十一行至三十行	九錢	七錢	六錢三厘	五錢九五	五錢六厘
自卅一行至五十行	八錢	六錢五厘	五錢八五	五錢五厘	五錢二厘
五十行以上	七錢	六錢	五錢四厘	五錢一厘	四錢八厘

時事新報

左の一篇は八月廿一日發にて米國紐育州遊學の社友より寄送し來りたる書面なり

日本婦人論と讀む

拜啓仕候 承れば日本にても近來婦人論大流行れ由、當地にては毎度奥様の跋扈に恐縮し居る最中、東洋の隅の日本にてハ婦人の無氣力と歎ずるとは世界もさて／＼廣きもの哉と被存候得共過日時事新報の日本婦人論を讀み又小生が日本に在りし折の經驗を思ひ合せて推考致し候に日本の如き國柄にてハ婦權擴張論の出で候も御尤千萬と奉存候或ハ無理に説を作り婦人は男子よりも愚にして弱きものとする愚弱なるが故に蹈み倒して可なりとの理由はあるまじ國に政府あり法律あるハ智に乏て力あるものヽ爲めよりも寧ろ弱を助けて強を制するとの主意なれば情理に濃なる文明人は愚弱なるもの程ますく之を保護せねばならぬ筈なり東洋の諺に女性は罪深しと云へど罪深しとて邪魔にされ數百年來卑屈の淵に沈みたる者と女子教育の自由を奪ひ之を精神の奴隷と爲して獨り自ら威張りたる者と孰れか其罪深かる可きや佛家の巧辯を以てするも倫之と言ひくろめ難るべしと被存候左れば日本の男子達も過去の罪業を懺悔して婦人に相當の自由と與へ婦人も亦自から其地歩を高むるに至らんと重疊希望に堪えずと雖ども權あれば愛に責ありと申す格言は日本の御婦人方に於ても乾度失念なき樣に致したく候當米國の婦人達は如何にも鷹揚に相逵なく卑屈從順なる日本婦人を目撃しつヽありし小生の眼を以て觀れむ勿論、女房孝行の米國人にても尚其横風なるに辟易する程なれども米國婦人が斯く鷹揚なるは洋服を服するが故に非ず束髪するが故に非ず將た頭にボンチツトと戴ル指にダイヤモンドの指環と挾むが故に非ず其手に握る所の權に對する丈けの責任と盡すべき智能を脳に貯ふるが故に御座候小生の實驗にて當地婦人には毎度驚服致すと多きが中に其博學多才にして幹事の能なるの一事にて最も感心致し候此點に至ては下宿屋の老婆にても亦容易に侮る可らず近くは先般小生が或る下宿屋にて紐育のインデペンデント新聞に譯出掲載しある時事新報の治外法權論を讀み居りしに下宿の老婆は生が一心不亂なる容子を覗き込み「君には熱心に何を讀み給へるや」と問ひければ小生は之れに答へて「是れにそは書生、商人、日傭取りに至るまで凡そ（Japanese）の形容詞と戴くものは血の涙と注いで讀む所の治外法權論で御座る」と申せしに老婆はドレ／＼とて其新聞を手に取り頓て之を一讀し了り扨て之と評論してさて／＼不條理なる外國人かな其土地に居て其租税と拂はざるとは言語道斷の次第なりと陳述したり流石に米人丈ありて國權などの空談には目も付けず直に税法の金錢談に及びたるは御國柄と知り玉ふべし、兎に角下宿屋の老婆どのが治外法權論と讀んで善くも惡くも之を評論するとハ感心なり憚りながら日本の下宿屋の老婆ハ勿論、歴々の夫人令孃方も或ハ此老婆に赤面するもの多かるべしと想像被致候小生ハ見る所に據るに下宿屋ハ老婆が新聞の社説を讀み得るハ唯學校の教育のみに非ず文明世界ハ交際繁多にして婦人相逢ふて常に世帯庖厨の事のミを語る可らず且つ分業宜を得てパンハパン屋、着物は仕立屋、各々其受持あるが故に下宿屋の老婆必ずしも火吹竹を弄し俎板を敲くに及ハず自然新聞紙にも注目する餘暇あるが故なり世に米國人は隣家のことよりも外國の事に委はしとの諺あるも畢竟右の譯柄にあらんかと被存候さて又當地婦人ハ能力は唯學識にのみ秀づるに非ず前年小生オハヨ州のクリブランド府に至り府中の萬小間物店に入りたる時其女番頭の商賣に活潑なるに感心せり二三の婦人、大なる間口の店を控え、客の顏色を窺ふて店中の案内賣捌に奔走し忽ち帳場に駈け付けて金錢の釣りと勘定する等其活潑驚くに堪ねたり當地にて八層の高屋に商賣するものは唯婦人あるのみにして有髯ハ粗大漢は其風を望んで自から不敏を愧づるの外なし或人は右女番頭の甲斐／＼しき振舞と見て其口にペンを啣へ左手に帳面と抜き右手に銀錢を取り出す氣色ハ實に火事場の騒たれ如くありと評せしが小生は此言實に的評なりと存候尤も當國婦人とて十人が十人皆な活潑なりと申す譯にハ無之中には希臘羅甸の字義論には明なれども之と臺所の隅に放て屋根の上の犬ころ同然の者もなきに非ず或は全く無學無藝のものも有之候へ共是れは男子とても同じ事に候右の如き次第なれば當國婦人が威張るとて譯もなく威張るに非ず目下日本にて婦權擴張論流行の折柄、日本の婦人達も束髪したからとて洋服を服したからとて踏舞するからとて其れで婦權と擴張し得べしと思はゞ飛んだ不心得と奉存候日本婦人論に就き小生の所見大畧如此に御座候

官報

〇太政官達第五十四號　官省院廳府縣
明治十六年（十月）第四十四號達海軍服制中左ノ通追加候條此旨相達候事
明治十八年十月五日　太政大臣公爵三條實美
下士以下服制表中「三等看護手」ノ次ニ「厨夫」「看病夫」チ加フ
下士以下帽圖中「二等三等下士及」ノ下ニ「厨夫看病夫」チ加フ

〇明治十八年九月三日
任歩兵少佐　歩兵大尉正七位勳五等　渡邊章
〇明治十八年十月三日
任敢國神社宮司　從四位　萩原員種
（以上三件本年十月五日官報）

雜報

〇グラッドストン氏　同氏は豫て咽喉病を患ひ殆と瘖疾となり去るも先頃より醫師セモン氏れ治療と受けて大に快方に赴きたるが未た平癒に至らざると以て右の保養かた／＼那威近海れ巡航と思ひ立ち去る八月八日夫人同伴にてトーマス ブラッセー氏所有小風帆船に搭して倫敦と出發し那威の諸港と巡航して到る處諸人の歡待を受け凡そ三週間餘巡遊の末去る九月二日無事に倫敦に歸着しなる由

〇機械廻送　大山陸軍卿が昨年中歐洲各國巡廻中佛國巴里府なるホルシユエシヤンエークジテランチー會社に注文せし農、商、工、用機械十五種、鐵道、鑛山工用機械十種、砲兵及海軍工用機械四種は何れも出來上り同國駐箚公使蜂須賀侯より今度廻送せしといふ

〇縁飾教場　京橋區日吉町三番地に在る東京府縁飾教場ハ去る明治十三年七月中右の所に設置になり横濱在留英國婦人スミス氏を教師となし東京府士族の婦女子に限り入塲せしむる成規ありしが昨年三月より廣く他府縣華士族平民れ別なく入塲せしむる事となりしより益々盛大に赴き昨今入塲と申込むもの頗る多しよし併し教場の定員と八十名と定め置き其上は目下入塲を許さぬ由にて當時三期生四十名、二期生二十一名、一期生十九名あり右の内三期生四十名と來る十一月に卒業する筈なれば昨今の申込者は其時を待て入塲せしむる都合なりと元來縁飾なるもれは外國婦人の衣服へ縫ひ附ける模樣飾りにて歐米諸國にては競ふて新奇の形を用ゆるよし左れば同塲掛官ハ此までわざと西洋風に倣はず日本流の模樣あるものと製造せしめ英米等の博覽會へ出品せしに孰れも好評と得たる中にも和蘭博覽會にては一個の元價六十一圓五十錢の品が百七圓餘に賣れたりと右は別に製方の巧妙なるに非ず只日本模樣の新奇なるが歐米人の好尚に適中したるなりと云へり

〇籠甲職れ會議　下谷淺草兩區內籠甲職及商人一同は一昨三日淺草三好町の三好亭へ集會して追々東髮の流行するので櫛 笄等の改造方と協議せしとぞ

〇菓子種の相場　府下の菓子種商ハ十五區六郡內に二十三軒のみあるが曩に菓子税則の發布以來菓子商の廢業せし者多く之か爲種商も得意先の減せしより商買向の閑暇になり從前よりも種相場と二三分方引上げたり

道明寺乾飯	一手に付一圓十錢	黄微塵粉	同五十五錢
新引粉	同 四十八錢	上微塵粉	同 一圓
菰色粳	同 四十八錢	岩種粉	同三十五錢
入微塵粉	同 六十五錢	上菰色粳	同 六十錢
西京微塵粉	同 一圓十錢	白丸	同三十三錢

〇電信取扱比較　昨十七年中英國にて取扱ひたる電信數は三千三百七十萬信、伊國同七百二十萬信にて日本ハ二百九十萬信なりしと

〇生糸輸出　昨日横濱出港の米國郵船シチー オフ リオデセネーロ號にて米國桑港へ向け輸出せし生糸

は左の如し
七十六番と
二個〇八十
十二個〇
三十二個〇
り八個〇百
〇九十四番
總計 六百

〇各軍艦碇
碇泊所を取
艦名 碇泊
日進 横濱
蒼龍 同
天龍 同
筑波 同
雷電 同
天城 同
東 同
淺間 同

〇宇都宮通信
先頃當縣師範
が休格を撿査
り二十四年
ル（一ッオー
れ平均三十
格れ五人丙
ものなりと
業は大に恢
地浴衣等に用
ありて紺屋
防績所にて
し晝夜の
丶扣へ
も拘はらず
位の以來
弊の爲め肥料
んといふ

〇東祥繪畫
新雜誌は十
入せしが
ることゝ

〇第四期
裁判所に

〇倫敦特別
然るに其
人となりたり
最も意味强
する有様は丸
顏色も何と
決して馬鹿
治にして
場に於て辨論
口せしめんと
訴ふるに在る
中は新聞記者
にて審取り
印刷に附する
發の新聞紙に
數四百萬の人
得るのミ
同しく電信を